

ナホトカ港では、特訓された「日本共産党青年突撃隊」と自称する赤旗腕章の行動隊の指揮によって十日間も「共産革命理論」やレーニン、スターリンのロシア革命史の講義や「赤旗の歌」などが、にわか仕込みの学習活動に追い回されたが、これも帰国のための踏絵であると我慢して真剣に勉強しました。

昭和二十四年七月二十九日、日の丸の旗をなびかせた大きな客船「明優丸」がナホトカ港に接岸、私も一人一人点呼を受けて乗船。八月一日、夢に見た舞鶴港に上陸し、生きて日本の土を踏むことに感激しました。

四、家族や国民の皆さんへの遺言

シベリア抑留中のあの地獄の生活を耐え抜いてきた今、しみじみ人の生命の尊さと、人は助け合ってこそ生きられることを知りました。どうかこれから次の三つを守り、よい世の中をつくって下さい。

- 1 これからは絶対に戦争はしないこと。
 - 2 親は子を、子は親を大切にすること。
 - 3 自分の行動に責任を持ち、健康でいつともよく働くこと。
- 以上申し上げ、私のシベリア抑留労苦調査報告を終わります。

私のシベリア抑留記

新潟県 富山 直次

まずソ連が参戦して満州に進駐した当時から記してみよう。

昭和二十(一九四五)年八月、日時は定かでないが、牡丹江には既にソ連軍が入っていた。勃利最後の撤収部隊の一員として牡丹江でソ連軍に遭遇し、散り散りばらばらになって目的地のハルビンに向けて山の中を食うや食わずで十五日夕方ハルピン市の郊外にたどり着いた。そこには関東軍

將校が日章旗と白旗を立てて、進駐して来るソ連軍を迎えていた。そこで初めて日本が敗れたことを実感した。その夜は軍の倉庫かなにかであったと思うが我が部隊と合流でき、戦友たちと涙して一晩中語り明かした。

翌日は倉庫の広場で武装解除。武装解除と言っても銃もなく、腰の軍刀や牛蒡剣ぐらいのものであった。それでもソ連軍は機関銃二門据え付けて武装解除は名目のみの略奪が始まり、時計、万年筆、手帖まで目ぼしいものはすべて掠取された。

そしてハルピンにいとと捕虜にする、牡丹江を経て日本に帰すと言われて、その日のうちに牡丹江に向けて出発した。前に後に横にソ連軍が見張り、鉄路の上を日夜の行軍であった。落伍すれば部隊と別れなければならないので歯を食いしばって歩いた。七日間の行軍で元の牡丹江に到着し、兵器廠跡の倉庫に入れられた。

九月十月と二カ月余り過ぎた十月三十日、一個大隊千人を編成してウラジオストクから日本に

帰すという名目でシベリアに連行されたのだった。行く先はイルクーツクから百十キロ入ったタインシュェット地区の収容所だった。そこはシベリア鉄道本線から百十キロ入ったところで、独ソ戦で工事がストップしている場所に日本軍を入れて鉄道工事を再開したのだった。我々を使うソ連人はすべて独ソ戦で捕虜になり刑を着てシベリアに送られた者で、民間人は一人もいませんでした。伐採する者、道路を造る者等に分かれて奥へ奥へと収容所を点々として作業をやらせられた。

翌年六月、大地の凍結もゆるみ、道床の土盛り工事に回され、ノルマー一日三立方メートルの土をターチカというボディは木箱、それに鉄車輪の一輪車を使って、板のタラップを押し上げて土盛りをする作業だったので、栄養失調と重労働でバタバタと倒れていった。ある日どうしたのか下痢を起こし一晩中眠れずに苦しみ、翌朝診察を受けた日本の軍医は、おまえは炊事のゴミ捨て場で何か拾って食ったのだらうと言う。私は絶対にそん

なことはしないと張り、顔にビンタを一つもらって一週間の絶食が言い渡された。薬などないので絶食しかなかったのだろうが絶食はつらかった。無事に治ってまたノルマに挑戦した。その後私はノルマを一三〇%上げてソ連から表彰されることになった、似顔絵が収容所に張り出された。それを見た軍医が、済まなかった、おまえはうそを言うような人間ではなかった、俺もおまえも新潟県人だ、頑張れと手を握られたときの嬉しさは今も忘れられない。

道床がある程度できたころ鉄道の敷設隊が編成されてその一員となった。鉄道の先端まで貨車でレールが運ばれ、道床にローラーを置き、その上を滑らせてレールを配る者、レールをジョイントする者、槌で犬くぎを打ち込んで固定する者等で、三年間いるうちに二百六十キロまで鉄道が延びた。よかったことは三百五十グラムのパンが敷設隊に入ってから四百グラムに増えたことだった。駅となる場所や引込線の場所などにポイント

入れも覚えてエンジニアと呼ばれた。復員後、鉾山で働くときレール敷設やポイント入れは大いに役立った。

昭和二十三年五月、二回目の表彰を受け、一週間の休暇をもらって憩いの家に入った。三日目の朝、ソ連の監督が東京ダモイだ、早く早くせき立てられて、半信半疑で、自分の敷いた線路の上を日本に帰る港に向けて揺られていることは誠に感無量であった。昭和二十三年六月二十三日懐かしの我が家に帰ることができた。

抑留中の労苦記録

岐阜県 荒川 良三

一、出生から入隊まで

出生地 岐阜県吉城郡古川町信包

生年月日 昭和五(一九三〇)年五月七日

学校 信包小学校高等科卒業